

浦和駒場スタジアム 改修計画

高橋令奈

制作主旨

2002年W杯に向け日本では多くのスタジアムがつくられた。しかし8会場が新設され、これからは需要は減ると考えられる。そこで既存スタジアムに着目し、試合開催時外にも日常利用でき、かつ新たな魅力を引き出せる改修計画を提案した。浦和駒場スタジアムは浦和レッズのホームグラウンドである。試合開催時は多くのサポーターで賑わうが、日常は閑散とし、施設的にも利用しづらい点があるため、改修案として3つの提案を行った。「屋根をつける」：既存スタジアムはほぼ屋根がなく、決して快適ではないのが現状である。そこで屋根をつけることで快適さや劇場の効果を提供した。屋根構造は「天秤式テンセグリック構造」で、ピン支承で天秤のように屋根が動くが、ステイカブルの引き込みで安定化を図る。敷地上の制約からペントなしの建方は有効であり、外力には各テンション材で抵抗しているのが特徴である。「客席の改善」：バックスタンド1階席の見づらい点を解消するため、観客席を前に出しサッカー専用に変更した。「市民開放スペース」：客席を前に出したことで生まれたスペースに日常利用できる空間を提案し、新しいスタジアムの形を提案した。

今回の提案はベストではないが、駒場が日本一のスタジアムになって欲しい！

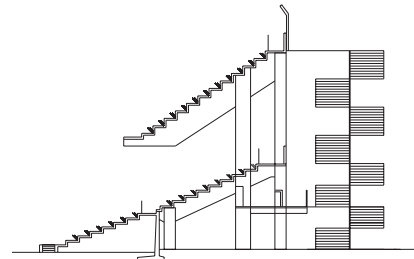
講師評：斎藤公男

高橋さんの計画は、本人が頻りに足を運ぶ既存のスタジアムに対する改修計画である。本計画では地域に密着した既存の競技場の改修をテーマにし、スタンド屋根の新設に加え、地域における新たな競技場の在り方の提案として、スポーツのみの利用でなく市民が日常的に利用できる複合施設への改修が行われている。今年開催のサッカー・ワールドカップに伴い多くの大規模競技場が新設されたことを考えると、今後ますます本計画のような既存競技場の改修に対する需要は高まると考えられる。

スタンド下部に設けられた市民開放スペースの提案は、スタジアムという比較的規模の大きな建築物の地域における新たな在り方を模索したもので、具体的な施設の中身に関する検討は必要なものの、その着想は評価できる。屋根架構システムとしてその規模が比較的自由に設定できる片持梁形式を採用し、テンション材と組み合わせることにより既存スタンドを残しながらの改修案が提案されているが、昨年建設されたスタジアムの構造システムとの類似性は否定できない。構造面と施工面の検討を付加すれば新規性を表現できたはずで、十分実現可能な提案だけに惜しまれる。今後の発展に期待したい。



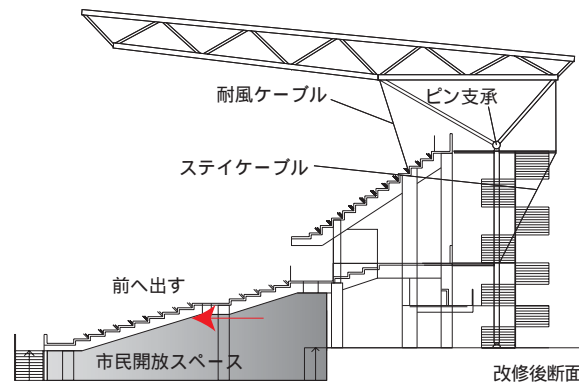
既存配置



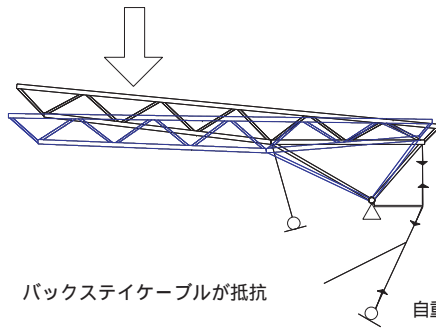
既存断面



改修後配置

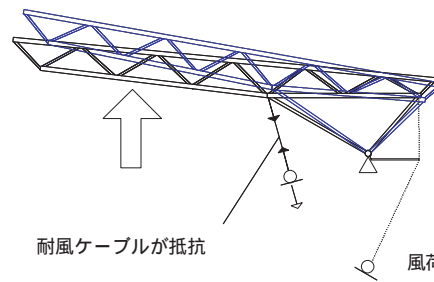


改修後断面



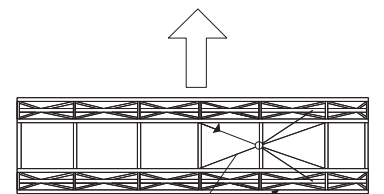
バックステイカブルが抵抗

自重時



耐風ケーブルが抵抗

風荷重時



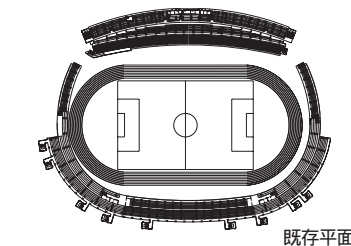
耐風ブレースが抵抗

地震時

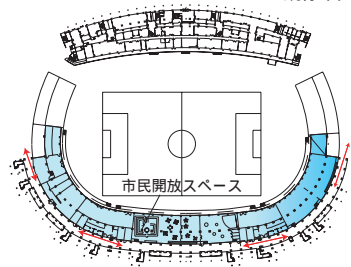
外力の抵抗メカニズム



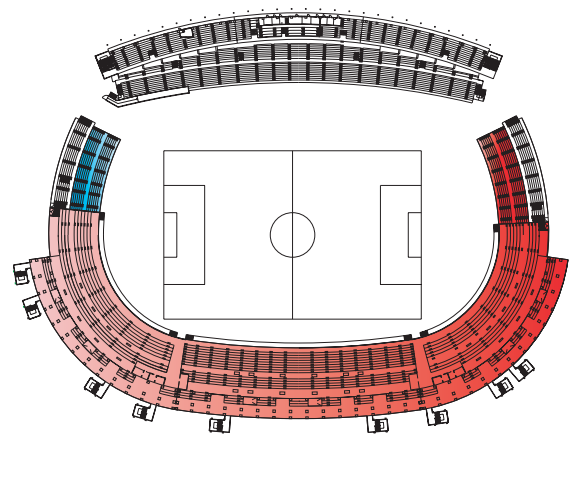
市民開放スペース



既存平面



改修後1階平面



改修後2階平面